

『同心結』と『雁南飛』にみる疑遅文学の特色

李 青

はじめに

「満洲国」についての研究は八十年代後半から中国が改革開放政策を実施し始めたことによって、研究環境が少しずつ整備されるようになってきた。特に、これまでに読むことさえ出来なかった資料の公開は、我々研究者に「満洲国」で興った文学の研究に絶好の第一次資料を提供してくれた。「満洲国」内に留まり、文筆活動を続けた一群の作家への中国国内における再評価の動きが、彼らの作品を再読し、新たな角度からこの複雑な一群の作家を再考する刺激を与えてくれた。

ここで特筆したいのは、当時もっとも文学の業績も影響力も大きかった「藝文志派」¹⁾に所属していた疑遅の文学である。当派は日中の研究者にとって、「満洲国」文学を理解する突破口の一つであり、重要な研究対象になっている。ただ、疑遅らは文人の顔を持ちながら、一方で政府機関に勤め、政治組織に名前を残している官憲に近い存在であった。ゆえに作品は行間を読まねばならず、再読すると全く逆の意味に理解できたりして、文意に惑わされることがしばしばあった。しかし、彼らの文学を読みこなせば、「満洲国」時代の文学の一側面が、より一層くっきりするはずである。異民族の占領下に置かれた中国人作家の心象風景はそれらの作品から読み取れるはずである。

「藝文志派」の主要メンバーには古丁、爵青、小松、疑遅などがいた。彼らの作風には個々の特徴がある。

本論では、作品に異国情緒が溢れ出る疑遅の小説に焦点を当ててみたい。疑遅は幼少期の二十年代から青年期の三十年代半ばまでロシア人の多い街——哈爾濱で過ごした。ロシア文化の薫陶は、後年疑遅文学の糧になり、古丁をはじめとする「藝文志派」の他のメンバーとはひと味違うエキゾチックな作風を呈している。特に「満洲国」時代には文学創作に多くの制限があり、書ける題材が少ない中で、疑遅文学に現れる異国描写——ロシアは斬新さとロマチックな雰囲気をもたらした。

本論では「満洲国」末期に書かれた『同心結』とロシア人を題材にした『雁南飛』を中心に解説し、疑遅文学に現れたロシア情緒を通じて、作家疑遅の心情に迫り、疑遅文学の芸術性を再発見しようとする試みである。

第一章 疑遅の生い立ちと文学創作活動

I 疑遅の生い立ち

疑遅は本名を劉玉璋という。ペンネームには劉朗、夷馳、疑遅などがあり、一九四九年（共産党政権）後には“劉遲”を用いた。疑遅というペンネームはもっとも長く使われ、彼の主要な文学作品はほとんどこの名前前で発表したため、一般的には疑遅と呼ばれることがほとんどである。

疑遅は一九一三年に遼寧省鉄嶺県に生まれ、幼少時代に哈爾濱に移住した。道外糧業工会私立職業学校、東省特別区第三中学で学んでいる。疑遅が哈爾濱に移り住んだ頃は、ちょうどロシア革命後に当たり、ロシア人移民の数は史上最多の時であった。

薛連挙『哈爾濱人口変遷』²⁾によると、一九二二年の哈爾濱の人口構成は中国人十二万六千九百五十二人に対して、ロシア人は十五万五千四百二人いたという。これに他の国からの移民も加わり、短期間だったが、外国人が中国人を凌ぐ勢力を有した。一九三二年十九歳の時に中東鉄道車務専科学校を卒業した。卒業後は、東繞小九駅、二層甸子駅、蜜蜂駅、烏吉密河駅に合計二年間勤務していた。

学校に在籍していた頃に、疑遅はロシア語をマスターし、多くのロシア人と肩を並べて勉強した。生前に親交のあった上官纓³⁾らによると、当時は学校に多くのロシア語の書籍や新聞があり、そこからロシアに関するあらゆる情報を得ることができた。文学に興味のある疑遅にとっては、原文でロシア文学の作品を読めることが、後の彼の文筆活動に大きな糧となったのは間違いはない。夜勤のあるときに、暇さえあれば、ゴゴリー、ツルゲーネフ、ゴーリキーなどの作品をむさぼるように読んでいたという。疑遅の作風を分析するとき、この経歴を無視することはできない。

哈爾濱のロシアをはじめとする外国人住民も、九・一八事変後に政局が不安定になったため、徐々に数が減りつつあった。疑遅も新しい活路を求めて、哈爾濱を離れ、同年七月に当時の「満洲国」の首都「新京」で、政府機関の國務院統計処に職を得ることになった。

一九三六年同じ職場の文学青年古丁、外文と、読書会を通して、志を共にし、芸術文学会を設立した。翌年文藝雑誌『明明』を創刊し、疑遅は同雑誌を拠点に、本格的に文学活動を始めた。ロシア語が堪能なため劉朗という名前で翻訳（詳細は後述）をした。文学作品は、はじめ夷遅、のちに疑遅というペンネームで、文壇で名を知られるようになる。以後、一九三九年に純文学雑誌『藝文志』の同人になり、文学の才能を存分に発揮することになる。一九三一年～四五年の間、雑誌『麒麟』と『電影画報』の編集に携わる。一九四三年に満洲文藝家協会の機関誌として、再スタートを切った『藝文志』の創作活動を四五年まで続けた。

日本敗戦後、対日協力者として「藝文志派」の主要メンバーの古丁や爵青などは共産党政権より手厳しい糾弾を受けた。しかし、疑遅自身は大きな迫害を受けず、政府に再雇用されることになった。一九四八年東北電影製作所に就職し、ソ連映画の翻訳に従事するようになり、この間に、彼が手がけたソ連映画は多数あるだけでなく、ソ連の著名な映画人の書いた映画の芸術に関する論文も精力的に翻訳⁴⁾した。

一九五六年に中国作家協会に入会したものの、これ以後文筆活動の停止を余儀なくされた。長春映画製造廠や農業映画製造廠などで働きながら、ずっと沈黙を守り通してきた。二〇〇一年十二月、四十五年ぶりに「満洲国」時代を題材にした長編小説『新民胡同』を発表した。八十八歳だった。

二〇〇四年、九十一歳で死去した。

II 疑遅文学の数々

疑遅の創作は一九三七年～一九四五年に集中し、黄金期は四期に分けられる。第一期は雑誌『明明』（一九三七年三月～三八年八月）時代である。この時期に疑遅はロシア文学の翻訳家として、かつ小説家として文壇にデビューしたのである。第二期は純文学雑誌『藝文志』（一九三九年六月～四十年六月）を舞台に活躍した、いわば第一次『藝文志』時代である。第三期は文学創作の傍ら、大衆雑誌

『麒麟』と『電影画報』（一九四一年～四五年）の編集に携わっていた時期である。第四期は政府の代弁者として復刊した雑誌『藝文志』（一九四三年～一九四五年）に拠る、いわば第二次『藝文志』時代である。疑遲は短編小説に長けており、主な作品は『花月集』（短編小説十編、一九三八年誠島文庫）、『風雪集』（短編小説十一編、一九四一年益智書房）、『天雲集』（短編小説八編、筆者未見）の三つの小説集にまとめられている。他に中編小説の『雪嶺之祭』（一九四二年『学藝』第二巻）、長編小説の『松花江上』（一九四一年『大同報』に連載。筆者未見。ただし、一部を「江城」という題で『満洲作家小説集』（一九四三年、出版社不詳）に連載）、長編小説『同心結』（一九四三年、芸文書房）がある。晩年に長編小説『新民胡同』（二〇〇一年、時代文芸出版社）を出版した。

他に「満洲国」新聞の文芸欄や雑誌に、また「満洲国」中後期には華北や上海の雑誌に、多くの短編小説を寄稿した。

第二章 長編小説『同心結』を中心に

『同心結』は「満洲国」末期に発表した疑遲の数少ない長編小説である。

太平洋戦争勃発後、「満洲国」内の言論に対する取り締まりは一段と強化されるようになった。「藝文指導要綱」⁵⁾の分布はその一つの現れと言えよう。政府が言論をコントロールしている新聞や雑誌が、戦時体制をサポートしていた。雑誌『藝文志』はこのような背景の下で復刊した。疑遲も「藝文志派」同人の立場から運命的に時局に迎合する作品を書かざるを得なかった。しかし、このような政治組織に制御されている文藝雑誌から一步離れ、疑遲が単独で書いた長編小説『同心結』を見ると、そこに戦争の暗い影や火薬の匂いはまったくくない。作品に書かれた中央大街という通りの名前及び町の風景描写から分析すると、哈爾濱の可能性が濃厚である。作品は疑遲の時局に迎合する創作に現れたごちなさ、または牽強付会はまったく感じられない。そこには疑遲の心の中に秘められていたロマンスと故郷に対する愛情が溢れ出ている。

I 疑遲と哈爾濱

疑遲が何年に哈爾濱に移り住んだのかを示す正確な資料は現在までのところ存在しない。疑遲が哈爾濱で教育を受けた年月日などから見ると、一九一〇年代末～一九二〇年代初め頃と考えられる。前述の通りこの時期に哈爾濱に集まったロシア人をはじめとする西洋人の数は史上最高であり、エキゾチックな環境が疑遲の人間形成や性格の陶冶、物事の考え方及び文学の審美眼の形成に、大きな影響を与えたことは間違えないと考えられる。

ロシア人のシベリア・極東への移住にはいくつかのルートと歴史的な変遷がある。十八世紀以前は処罰や強制というイメージがあった。十九世紀後半からは、幾たびかの不平等条約やロシア政府の奨励策によって、軍人をはじめとするロシア人が「満洲」に移り住むようになった。気候的に極寒のシベリアと比較して温暖な「満洲」に移民が押し寄せたことも不思議ではない。清末には東清鉄道の着工と竣工によって、沿線や哈爾濱にロシア人が集まった。一九一七年にはロシア革命が勃発した。レーニンが率いる革命党は周辺の小さな国々を併合し、巨大なソビエト社会主義共和国連邦政権を誕生させた。革命の混乱及び恐怖から逃げようと、多くのロシア人が「満洲」にやってきた。ロシア領からきた移民の構成を見てみると、ロシア人の他にウクライナ人、白ロシア人、ユダ

ヤ人などがいた。没落した貴族もいれば、貧しい農民もいた。中国領に押し寄せたロシア人は、一時期中国人住民より多くなった(註2参照)。ロシア文化の伝播はごく自然な形で民間に浸透していった。

革命前の帝政ロシアは近代国家に移行しつつあり、ロシアからの移民は「満洲」において文化的に優位に立っていたことは容易に想像できる。外部からの移住は二百年以上も禁じられてきた⁶⁾ため、未開発地だった「満洲」にロシア人移民はあらゆる意味において、近代的な息吹をもたらした。「満洲国」へのロシア移民を研究している坂本秀昭・伊賀上菜穂の著書にはロシア人村の当時の住まいの様子が次のように記されている。

インコは刺繍の入った手ぬぐいやレースで美しく飾られ、その前には清潔なクロスがかかったテーブルが配置されている。窓にはレースのカーテンがかかり、窓辺にはゼラニウムなどの観葉植物が置かれていた。(中略)飯塚(飯塚浩二…筆者注)は当時このような室内を見た日本人が〈彼らの生活がいかに文化的〉だと思い、〈西洋風であることによって、現代の日本人の用語では、近代的でさえある〉という感想を持ちがちであったと書いているが、それももったもなことであろう⁷⁾。

ロシア文化の影響は、「満洲」の一般社会に強く現れているばかりでなく、文学の領域においても、東北の作家たちに多大な影響を与えた。疑遅のようなロシア人の多く住む哈爾濱育ちの作家が生活のなかでロシア文学に触れ、影響を受けるのは、ごく自然なことだと考えられる。ロシアの存在の大きさは東北作家たちの文学作品からも簡単に拾うことができる。彼らは近代ロシアのあらゆる事象を直に体験することができたのである。その体験が文学にもたらした影響は、関内の作家たちが体験した間接的なロシア文学の影響とは、質的な違いがあると思われる。この点について疑遅の作品を取り上げて、検証していきたいと思う。

II 『同心結』におけるロシア描写

『同心結』は南城(南「満州」の某都市を指す)出身の美術と音楽を学ぶ苦学生王茂栄(二十四歳)、古城(哈爾濱と思われる)の財産家張紹武(四十代後半)及び張紹武の娘雪芳(女学生、十代後半と思われる)の間に展開されるストーリーである。

古城で美術と音楽を専攻したが、卒業後に職を得られず悩んでいる苦学生王茂栄が主人公である。彼はある日、山の中を散策中に、狩猟にきた財産家張紹武が蛇に襲われている場に遭遇し、彼を助け出した。以来、二人は意気投合し、王茂栄に恩返ししたいということで、張紹武は北城のロシア人が経営する美術学校に王茂栄を入学させ、自宅に住ませた。やがて張紹武の娘雪芳が王に惹かれ、恋に陥る。しかしある時、雪芳は王の貧しい出自を知り、王を冷遇するようになった。王は私信が盗み見られたという理由で、雪芳と喧嘩別れした。張家から追放された王は再び南城に戻るしかなかった。「階級」を超えられない現実におち当たった王は、ただ前途の見えない暗闇のなかを彷徨うばかりだった。

小説の脇役として登場するのはほとんどロシア人である。古城美術学校の校長、喫茶店のウェイトレス、街を散策する婦人、物乞い…いずれもロシア人である。財産家張紹武の家で居候していた王茂栄が目撃した張家の生活は、実に西洋化された近代的な暮らしだった。張親子は出かけるとき

に、当時はまだ珍しい外国の自動車に乗っている。家には電話機がある。夜のパーティーに参加すると、ロシア風の料理が並ぶ。普段暇つぶしに行っている喫茶店にはロシア人ウエートレスが登場する。当時哈爾濱の上流階級の生活には、西洋やロシア風の生活スタイルが浸透していた、その一端が小説から分かる。

『同心結』は中国人王茂栄や張紹武親子を主人公にしている。しかし、彼らを取り巻く環境や周辺の描写には、特別な工夫がある。疑遅は自分をもっとも熟知している哈爾濱を舞台にし、そこで共に生活してきたロシア人を小説の人物や場面に風景や人情の描写を行い、異国情緒あふれる独特の雰囲気を作り上げた。

1 異国情緒あふれる風景の描写

『同心結』には綺麗で異国情緒あふれる街城北（哈爾濱）の描写が多い。疑遅はこの街が如何にロマンチックでロシア情緒があったかを、見事に描き出している。

王茂栄が古城駅に着いたときに目にした風景は、次のように描写される。

茂栄は何もかも新鮮に感じた。高く聳え立つ建物はいずれも北欧式である。(駅の)向かい側のガーデンに奇異な植物が植えられ、夜のそよ風によって濃厚な花の香りが漂ってくる。駅を行き交う人の数は南城より2倍も多い。白ロシア人女性が談笑しながらしゃなりしゃなりと歩いてゆく。人びとに西洋のロマンチックな情緒をかき立てる。

ここでは、都会古城の繁栄ぶりや、その異国情調が聳え立つ北欧様式の高い建物、西洋風のガーデン、そこから漂ってきた淡い香り、町を散策するロシア婦人などによって表される。それらは王茂栄にそして、読者にも、ヨーロッパにいるかのような錯覚さえ感じさせ、ロマンチックな雰囲気を与える。

また王茂栄が通うシャビスキー（沙微斯基）私立美術学校の敷地内の様子などもいかにも近代的で高度な芸術性が感じられる。

車から降りると、ロシア人が住んでいる庭に入った。花に埋め尽くされている庭であり、周囲は小さな榆の木に囲まれている。数人のロシアの少年少女が階段の下にあるベンチに腰掛け、のんびりと春の雰囲気を楽しんでいる。洋風の窓からピアノの音が流れてきて、このリズムカルに響く美しい音楽は、まるで春の到来に捧げる賛美歌のようだ。

他にも学校の様子が伝わる場面がある。美しい洋風の建物のなかに、ロシア人画伯シャビスキーが経営する美術学校がある。画室で真剣に写生をする「本国（中国）とロシアの青年男女はみな、それぞれの画板上の未完成作品を玩味している」とか、戦争の傷跡の残るピアノと芸術家としてのシャビスキー……などの描写を通して、格式のある、芸術性の高い学校の雰囲気を伝えている。

この学校は中口の学生が同じ空間を共有し、西洋の近代的な美術と音楽を勉強している。これは疑遅自らの学校経験と似ている。疑遅の通っていた中東鉄道車務専科学校にはロシア人の同級生が大勢いた。彼らは共に近代的な鉄道に関する専門知識を学んだはずだ。疑遅が鉄道学校で吸収したロシア的な栄養分がシャビスキー私立美術学校をもって具現化されたのではないかと思わずにはい

られない。ここにも疑遅の心の中にあるロシア情緒とロマンスが表れているように感じられる。脇役として登場するロシア人もストーリーを引き立てている。

2 ロシア人についての描写

『同心結』には、異国を流浪しているロシア人の悲惨な姿もリアルにスケッチされている。

このあたりを疾走する小型乗用車を運転するドライバーは、白ロシア系がほとんどである。それはここ何年かの間流浪し、貧困に陥り、他に職が得られなかったからだ。彼らはやむを得ず富豪だった頃に乗り回していた車を運転し、これまでもっとも軽蔑していた人たちを乗せる。生活のために彼らは土地の言葉を暗記し、往事の傲慢さを隠さざるを得なかった。土地の人びとに卑賤な笑みを浮かべ、徒歩の旅行客に声をかけている。

時代が感じられる一場面である。かつて貴族だった白ロシア人たちは、第一次世界大戦やロシア革命のために流浪の旅を強いられ、中国の北の大地にたどり着いても貧困に脅かされる。その日の暮らしのために、貴族の傲慢さを隠し卑屈になる彼らを、非常にリアルに描いた。ロマンチックな町の雰囲気と対照的であり、一抹の哀愁を帯びた描写といえよう。

疑遅はロシア人の悲運を書くことによって、作中の主人公の心情や運命を思わせる描写もしている。

夕暮れは徐々に深まり、車は夜景の華やかな黄昏のなかを疾走する。通りの両サイドは灰色で、ぼんやりと暗く、物寂しい。ロシア人女性の落ちぶれ消沈した面影が道ばたの木の下に弱々しくぼやけて映っている。家々に慌ただしく夕刊を配達している青年の顔には疲労困憊の色が隠せない。

第一印象の古城の情景と比べて、どこか寂しくもの悲しい描写である。まるで王茂栄の前途多難を暗示しているかのようでもある。

ラマ台にあるロシア人の教会内はライラックが綿のように一面に咲き乱れている。大直街一帯はショウウィンドウの飾りが実に光り輝いて目を奪うようだった。だが街角では、年中物乞いをしている盲目のロシア人が、昂然として悲しそうな歌を歌っている。

上の二つの引用は王茂栄が居候先の張親子と決裂し、古城を離れる前に、シャビスキー私立美術学校のシャビスキー先生に別れの挨拶に行く直前、先生の「温和で純朴な」顔を思い浮べつつ見た町の様子である。ロシア移民がもたらした町の繁栄と華やかさは相変わらずであるが、最初の心の躍るように軽快なロシア人の様子が見られず、「落ちぶれ消沈した面影」とか「悲しそうな」歌声しか描写されない。まさに主人公の気持ちを表現しているかのようである。自分の憧れていた近代的な西洋美術やロマンチックな古城に対する、惜別の情を表しているのではないか。

他に、複数の若い登場人物が読んでいた本として、ゲーテ作『若きウェルテルの悩み』、謝冰心や巴金の作品などが紹介されている。五四新文化の息吹が東北の大地にも吹き込み、青年たちに影響

を与えた跡を垣間見ることができる。

3 作品から透視される作者の心情——同時期に発表した他の作品との比較

疑遅は「満洲国」末期に様々な形でまったく趣旨内容の違う作品を発表した。それらを比較してみると、同時期の作品であるにもかかわらず、発表場所によって、思想や内容がまったく違うことが一目瞭然である。ここでは「満洲国」末期に発表された三つの作品の比較をしてみたい。

『同心結』は古丁が主催する芸文書房から出版しており、出版元は当然当局の監視下にある。しかし、半民半官という性質ゆえ、作品には政治と一線を画する側面も見られる。

同時期に疑遅は第二次『藝文志』に『凱歌』三部作として『曙』、『望』、『明』を連載した。(一九四三年第一巻、第九号、十号、十一号)ここでは『曙』の内容を見てみよう。

そこには沙嶺屯の中国人地主呉海亭が、日本開拓団の地主谷森と手を取り合い、村の人々を率いて、政府の戦時下の呼びかけに応える「勤労増産」のストーリーが展開されている。中国人と日本人は家族のように親しくつき合い、助け合う熱い場面が繰り広げられる。

典型的な国策文学であろう。他の二作品も国策に沿った政治色の濃い作品であった。雑誌は満洲文芸家協会の機関誌として、当局の代弁者であり、内容は政府の意に沿うように作成されている。

他に短編小説『長煙』(一九四三年、『華文毎日』第十巻、第五号)がある。掲載雑誌は日本国内(大阪)で編集され、中国や「満洲国」に持っていき、販売するという特別な編集体制を取っていた。内容から見れば、「満洲国」で掲載が許されないような作品を発表していることから、内地にはある程度の“自由”があったことが伺える。

煙筒山に住む農民馬金升は十年前に「事件を起こし」、故郷を離れること十年間になった。年老いた母、ひ弱な妻、家の古びた籬…幾度も脳裏を掠め、「帰るなら、立派にならなくては」と決心し、外の世界であらゆる苦難を乗り越えてきた。望郷の念が日増しに強まり、ついに帰郷を決心した。しかし、家を目の前にして、母や妻が恋しい気持を我慢して、再び家と違う方向へ姿をくらました。

十年間も首を長くして息子の帰りを待っている母、夫の帰りを待っていた妻の元に帰るはずの馬金升は家に帰らなかった、あるいは帰れなかった理由は何なのか、読者に謎の残る一作であろう。著者が主人公馬金升に与えた素描はいかにも「満洲」の好漢というイメージが強い。「天地を勝ち取った後に故郷に帰還する」、「帰るなら、立派にならなくては」など心理描写と、吹雪や険しい山道を急ぐ馬金升の姿は勇ましい。また風景描写もきわめてすばらしい。荒々しいタッチで、「満洲」の早春風景を見事に描き出している。主人公の望郷の切なる気持と、早春のまだ冷たさの残る、万物が蘇りつつある雰囲気が見事にマッチしている。疑遅らしい力作である。内容的には様々な憶測を誘う箇所があり、「満洲国」内において、検閲が厳しさを増す時期であったことを考えれば、なかなか発表しにくい作品ではないかと思う。そういう意味で、日本国内編集というすきにつけ込んでの発表ではないだろうか。

これまで哈爾濱においては比較的自由に創作できたのに、「新京」では「満洲国」のあらゆる面の束縛がきついと感じた疑遅。特に文筆活動に従事している者にとっては、当局の顔を伺いながら、書きたくない内容を強いられつつ書くのは苦痛のはずである。彼がいろんな場で、「精神的に苦悶している」ともらしたのも、このような環境の変化(哈爾濱の「自由」と「満洲国」の不自由)から来ているのではないか。桎梏から抜け出すために、そして、厳しい検閲の網をかいくぐるための工夫が、疑遅にとっては青年時代まで暮らした哈爾濱を描くことだったと思われる。学校教育の中で受けた

ロシアの強い影響、日常生活の中、自然に肌で感じ取ったロシアを書くことによって、彼自身が癒されているのではないか。モダンな哈爾濱の町の風景、登場するロシア人の姿……いずれにも作者の愛情が感じられる。没落した貴族や物乞いの哀れな姿があっても、憎まれ役は存在しない。むしろ、貴族からタクシードライバーに転落したロシア人を飄々としたタッチで描写しているように感じる。物乞いであっても、めげずに「昂然として歌っている」。こうした描写の方向性からは、暗いマイナスイメージを感じることもなく、ロシア民族の民族性さえ感じられるような明るさを作品から発しているように思われる。

しかし、「新京」に移り住んでから、作風には明らかに変化があった。「郷土文学」の先駆とされる「山丁花」⁸⁾をはじめ、疑遅の作品は暗いとされている。社会の底辺でもがく人びとの姿や社会の矛盾、暗黒面を多く書くようになった。「満洲国」で目撃した現実を題材にした作品は、哈爾濱のロシア的な要素を取り入れた作品とは違いすぎる。「満洲国」時代以後、疑遅は「郷土文学」の旗手とされたが、ロシアを題材とした作品を書くことによって、彼独自の「郷土文学」を作り上げたと言えよう。

第三章 ロシア人を主人公にする『雁南飛』

『雁南飛』は疑遅が雑誌『明明』（第一巻、第五期一九三七年七月一日）に掲載されたロシア人を主人公にした短編小説である。登場人物は白ロシア人のアンドレイ、アンドレイの妻、娘、それと、組合のために働いている白ロシア人アレキサンダー及び組合職員である。

白ロシア人アンドレイ一家は第一次世界大戦によって故郷を追われ、財産も失って、満洲の地に流れてきた。しかし、ここの生活も楽ではなかった。しまいには、生活の支えになっていた乳牛も、困窮のため、手放さざるを得ないはめになったというストーリーである。

作品はたった数頁しかない短編であり、ストーリーもこみいったものではない。しかし、発表された時期は、ちょうど「満洲国」政府が一連の農業政策を公布した時期と重なる。一九三六年末、「満洲産業開発五カ年計画」に則って、一九三七年春に農業政策審議委員会が立ち上げられた。一九三七年五月には「満洲国農業政策の基調」⁹⁾が政府に答申され、その後の農業政策を決定づけた。この中には「農民は漸次組織化して農村共同組合に編成し、而も農事協同組合は満洲国の一般行政機構と密接に関聯せしめ、以て行政と経済の融合を図る」と明言されている。さらに一九三七年六月二十八日には『農事合作社法』¹⁰⁾が発表された。

この二大農業政策について、岡部牧夫は以下のように見ている。「農業合作社は、にわかに農業増産必要にせまられた満洲国が、政策の徹底をはかり、またリャンチャン（糧棧—筆者注）¹¹⁾の農民搾取を軽減して、農産物の流通を直接統制するためにあみ出された。したがって形式上は私的な組合である金融合作社とはことなり、はじめから農政を実現するための公的機関という性格が強かった」¹²⁾。このように分析した上で、組合については「五カ年計画期の一つの柱」とする政府のねらいを指摘している。

疑遅は作品の中で「組合」という言葉を使っている。上記の一連の農業政策の公布と作品の発表とはわずか二ヶ月しか隔ってなかった。これは上記の「農村共同組合」制度を強く意識して書いた作品と言わざるをえないだろう。

作品の内容を見てみよう。アンドレイ一家の生活は二頭の乳牛によって支えられている。妻は少しでも良い値段で「組合」に売り、生活費や病気の治療費に充てようとしていた。しかし、「組合」はそう優しくはなかった。まず、アンドレイ一家の前に現れた一言も発しない制服姿の「組合」職員は不気味な雰囲気を選び、人に威圧感を与える。この職員が中国人か日本人かは作品中では不明であるが、「組合」の意向は「組合」に雇われたアンドレイ一家と同じ白ロシア人のアレキサンダーに言わせている。やせ細った二頭の乳牛の牛乳を検査したが、不合格だと告げられた。牛乳の質の悪い乳牛を組合に手渡すことを勧められ、安い引き取り値が提示された。これに応じたくないアンドレイ夫婦に「乳牛の個人売買は許されない」と脅迫じみた言葉を発した。しまいには、八方塞がりになったアンドレイ夫婦は断腸の思いで二頭の乳牛を手放さざるをえなかった。

作者疑遅はアンドレイの妻の口を借りて、「組合」側に立つアレキサンダーに対して、「我々はお互いにロシア人よ。我々に損させてはいけないよ」と言わせる。「組合」に対する抗議を想起させる。この「組合」を巡る一部始終を通じて、疑遅は「組合」の狡猾さを巧妙に描き出した。そもそも「農業合作社」や「農村共同組合」は、国家的な統制手段として、上から下まで強制的に実施された制度である。これまで東北の農村では、小作農や自営形式の伝統的なスタイルが多かった。「組合」制度の実施は間もない頃に誕生したこの作品は、農村という末端組織を国家権力の統治下に置こうとする際に生じた矛盾を露呈させた作品と言えるのではなかろうか。

作品の主人公は全員白ロシア人であるところに注目したい。これには作者疑遅のどのような思いが込められているのだろうか。

作品の冒頭にアンドレイが故郷を懐かしく思い出す描写がある。

彼はぼんやりと数年前の色んなことを思い出していた。忘れがたい思い出、ニコライ二世全盛の頃の賑やかさ、それから彼は自分の故郷を思った。

故郷のクラスキー村は美しい所だ。傍らには静かにドン河が流れている。春夏の候には、名も知らぬ野の花が咲き乱れる。自分の家は村の南端にある。柵をめぐらし、自分で胡桃を植えた。もうどんなにか伸びていることであろう。(中略) 彼はあの時大戦が勃発したことをひどく恨んだ。そして自分は財産、故郷を失ってしまった……。

疑遅は意図的に、戦争ですべてをなくし、故郷から追われ、帰りたくても帰れない美しい故郷への望郷の念を禁じ得ないアンドレイを主人公にした。当時の「満洲国」は国策として日本からの移民政策が執行された。開拓団と称する日本移民のために、中国人農民の土地は強制的に徴用され、住み慣れたところから他へ移住させられた。一九三四年三月に発生した「土龍山事件」はこのような背景の下で起こった惨劇である。事件は北「満洲」三江省伊蘭県土龍山地区で、「日本軍の土地買収」、「銃器回収」、「種痘」に反対して一万人の農民が武装蜂起した。この地区では大量の開拓団が入植したために、中国人の土地が強制的に売買された。さらに、治安維持のために、保甲制度が強行された故に、反発したと見られる。全東北を震撼させた大事件は、当時哈爾濱にいた疑遅の耳にも入ったはずである。農村の変わり様を、ロシア人家族を借りて描いたのは、疑遅ならではの手法であろう。

先祖代々住み慣れた土地を異国からやってきた開拓団や兵隊に追われた「満洲の人々」の運命は、アンドレイ一家の運命と同じだろう。彼らの望郷の悲哀を、作家疑遅がロシア人の姿を借りて、切々

と語っているように感じずにはいられない。疑遅は作品にロシア人の運命を描くことによって、自分たち、つまり「満州国」で生活している人々の運命との共通性を暗示している。お互いの悲惨な運命は、相互に同情と憐憫の感情を抱かせる。疑遅のようにロシア文化に影響されて成長した人間にとって、アンドレイ一家の境遇は決して他人事ではない。自分自身も愛する哈爾濱から「満州国」の首都「新京」に流れている人間である。作品中のアンドレイ家の壁に掲げられている聖母マリアの肖像や、故郷のドン河の絵などから一家の望郷の念が伝わってくる。最後のアンドレイと娘の会話も意義深い。南へ飛んでいく雁を指して、アンドレイは娘に「あれはね季節を知っている渡り鳥でね、春になると南から飛んで来て、秋になるともう此処が寒くなるというので、またその暖かい綺麗な故郷に帰っていくんだよ」という。娘は「まあ故郷に帰れるのね……そしたら、パパ、私達の故郷は？」と作品はこのように余韻を残して結ばれている。

疑遅の筆が白ロシア人の悲運に対して無限の同情を注いだ佳作である。

第四章 疑遅文学に現れるロシア情調の意味

I ロシア文学の翻訳

前述のとおり、疑遅はロシア人がもっとも多く哈爾濱に住んでいた時代に幼少期と青年期を過ごし、ロシア人と机を並べて勉強していた。母国語である中国語以外にロシア語も堪能であった。彼の心の中にロシア的なものが多いことは作品から検証済みである。一九九五年一月に疑遅は回想録「『『明明』を回想して」(以下は『回想』という)を書いた。原稿は日本語に翻訳され、『地球の一点から』¹³⁾に発表された。『回想』には古丁、外文(単庚生)と芸術研究会を立ち上げ、勉強会をした様子が克明に記されている。三人は順番に体験を発表した。疑遅の番になると、「私は哈爾濱と中東鉄路沿線の白ロシア人の生活、彼らの苦悶と没落しか語れなかった。異国情緒は彼らにとっては、興味深かったようだ」と『回想』に記している。ロシア人の生活を熟知していた疑遅は、「ロシアの家庭がパンを作る話」について発表したこともあった。疑遅等三人は励まし合いながら、作品の創作でも競い合った。疑遅は『回想』で、自分がロシア文学者の作品を翻訳したエピソードを披露している。「長吉(古丁を指す。筆者注)は長い間、あたためていた短編小説『もう一年』を書き始めていた。私も慌てて、二編のロシア文学作品を試しに翻訳してみた。チャーホフの『婚礼』と『送葬』であり、およそ五、六千字だったと思う。『大同報』副刊に投稿したら、すんなりと載せてくれた。これで私は非常に勇気づけられた。」

雑誌『明明』の創刊に大いに喜んだ疑遅は当時の中国語雑誌の少なさを嘆き、自分が哈爾濱で体験したロシア人社会のことと比べ、次のように回想している。

私は哈爾濱から来たので、哈爾濱にいる二十万人くらいの白ロシア人の生活実態は熟知している。当時私は恩師のレベンチェフ先生のお宅によく行った。ご馳走にもなった。彼らは外国に亡命している立場ではあったが、文化生活においても、精神生活においても、我々より遙かに高かったことを知っている。二十万人の人口に、雑誌だけでも『国境線の外』、『霞の光』のほか不定期の『露西亞評論』も出している。我々はとてもたちうちできなかった。

自分たちが今後活躍する場が得られたことを喜んだ思い出を書いた疑遅の回想から、同時に、疑遅が哈爾濱で触れたロシア人の生活の種々相を垣間見ることができる。

一九三七年に雑誌『明明』の創刊によって、疑遅は文学創作と共に、ロシア文学の翻訳にも力を入れた。『回想』には疑遅や古丁のチェーホフに対する特別な思いが綴られている。チェーホフはモーパッサンと並んで短編小説の名人と言われている。疑遅が創作した短編小説には、ストーリーの簡潔さやわかりやすいところ、心理描写のうまさなど、チェーホフの影響と思われる部分が随所に見受けられる。

ロシア文豪の作品の翻訳以外に、「満洲国」在住の白ロシア人作家バイコフの作品も翻訳した。『藝文志』（第一巻、第四号、康德十一年（一九四四年））に劉朗というペンネームで翻訳した『母親』がその一編である。

Ⅱ 疑遅にとってのロシア文学の意味

ロシア・ソ連文学は五四運動後に中国に翻訳紹介された。これは歴史的な三つの事件と関係がある。まずはマルクス主義が中国に入ってきた時期、二番目に新文化運動の勃興の時期、三番目は抗日戦争時期である。特に三番目の場合は、ちょうどソ連国内もナチスドイツの侵攻に抵抗する時期であり、作家たちはこぞって敵と戦い、祖国を守る愛国小説を書いた。例えば、シーモノフの『夜となく昼となく』、ファジェーエフの『青年近衛軍』、ショーロホフの『祖国のために彼らが戦う』などが大量に中国語に翻訳された。抗日戦争の真っ最中の中国作家にとっては、ソ連の愛国文学の導入は非常に励まされることだったにちがいない。「満洲国」時代の文学を論じるとき、ロシア・ソ連文学の影響が如何に大きかったかということはしばしば言及されている。

疑遅文学を研究する多くの研究者は疑遅の特殊な経歴に注目し、彼の文学及び作風にロシア革命の影響が決定的だという論調も多い。早くから革命に目覚め、異民族の侵略を意識するようになったかのように断定する傾向が感じられる。例えば、申殿和・黄万華の『東北淪陥時期文学史論』に次のような記述がある。

彼は同僚の若いソ連人からモスクワのメーデーのデモ行進、ソ連の新しい農村のこと、赤い広場にあるレーニン廟のことをはじめて聞いた¹⁴⁾。

このような内容を疑遅が耳にした可能性は高い。革命後の様子や革命思想が流れてくることは自然の成り行きだと思う。疑遅が興味をもったり、影響を受けたりすることも当然のことであろう。しかし、一九二〇年代から一九四〇年代半ばまで哈爾濱に集まったロシア人の多くは、革命に反感をもつ者がほとんどであった。彼らは国内の革命によって、財産を没収され、弾圧に耐えきれず、移住してきた旧貴族や地主、有産階級の人々と、戦乱を避けるために逃げてきた一般庶民であった。疑遅が接触したロシア人は、革命を恐れたり恨んだりする人が多かったはずである。決して革命がすばらしいと思っていたはずはなかった。そう考えると、革命に関する新鮮な話題とは逆に、革命の残酷さをロシア人から耳にしたことの方が多いのではないかと考えられる。それは短編小説『雁南飛』、長編小説『同心結』及び回想録「『明明』を回想して」などからも見る事ができた。疑遅が当初からロシア革命を通して革命に目覚めたという見方は、一部学者の論文に散見されるが、当時の状況から見ても、またこれまでの資料から見ても、甚だ根拠不足ではないだろうか。

何よりも疑遅自身、ロシア革命から影響を受けたと述べる回想録は、一切残していない。なぜロシア革命について語らなかったのかは定かではないが、新中国建国後の度重なる政治運動や、始終つきまとった不名誉な「漢奸文人」というレッテルから推測すると、物言えば唇寒しの状態だった疑遅の立場からくるものではなかろうか。

近年、中東鉄道時代を経験した存命中の方からの率直な回想が見られるようになった。これまでソ連兵へのマイナス発言はタブーにされてきたが、最近になって、ようやく中東鉄道沿線に駐屯していたソ連兵の暴力行為が明かされるようになった。革命が中国に多大な影響を与えたことは事実である。中国共産党はソ連革命をモデルにし、政権を獲得した後も、ソ連の功績を高く讃えてきた。文学においても、二十年代から左翼作家連盟という文学団体がロシア・ソ連文学から絶大な影響を受けた。特に抗日戦争期には革命ソ連文学の影響が文壇に色濃かったのも文学史ではすでに定説となっている。

東北淪陥後に関内に逃れた簫軍の作品『八月的郷村』や羅烽の『帰来』、端木蕻良の『大江』、駱賓基の『辺陞線上』などはいずれも、後年、反ファシスト大戦時のソ連文学を模倣しながら、日本の侵略を受ける東北部を舞台に小説の創作をしたと指摘された¹⁵⁾。疑遅の場合は「満洲国」時代に同じ仲間の小松から「疑遅は北満の大荒原に長く居住していた。彼はゴーリキーの本を翻訳したことがある。チャーホフの本も読んだことがある」¹⁶⁾と評されたことがある。以後、疑遅文学はロシア文学に深く影響されたとしばしば言われるようになった。

しかし、同じロシア文学の影響を受けたとあって、その背景は各々異なる。疑遅を考察する場合には彼が置かれていた当時の社会環境を抜きにして考えることはできない。彼の作品を全体的に見ると、ロシア的な要素が極めて強いことは否定できない。けれども、それらの要素はロシア文学から影響されたとは考えにくいのも事実である。彼が記述したロシアの数々はいずれも自分の生活で見聞したことが多い。特に、哈爾濱の生活は彼の後年の創作に貴重な題材を提供した。無論、ロシア文学の影響は彼の数々の翻訳や言論から検証することができる。三十年代に古丁、外文と文芸研究会をやっていたときから、彼やメンバーの発言にチャーホフの名前が頻繁に出た。そして、疑遅自身もチャーホフ作品の翻訳を精力的にこなした。これらの史実から見れば、疑遅はチャーホフ文学に傾倒し、読んだり、翻訳したりすることを通じて、自分の文学を充実させることを実践したと言えるだろう。

新中国が成立してから、ロシア・ソ連文学による中国現代文学への影響が論じられるとき、政治的な理由もあり、抗日戦争時に革命ソ連文学に鼓舞されたことばかり強調されてきた。ロシア・ソ連文学が功利的に使われたイメージが感じられる。しかし、疑遅文学の特徴は他のロシア文学を模倣する作家と一線を画したところにある。疑遅は日常的にロシア文化の薫陶を受け、感銘を受け、ごく自然にロシア文学を受け入れたと考えられる。

哈爾濱時代について後年多くを語ろうとしなかった疑遅のことを考えると、政治的に位置づけられることを嫌悪し、心の中にある美しいロシアのイメージを壊したくなかったのかもしれない。幾つかの時代に翻弄され波乱に満ちた彼の人生を思わずにはいられない。貴重な真実は歴史の煙霧に埋もれてしまった。私たちにとっては何とも残念なことである。

終わりに

疑遲は一生で三つの時代を経験した。それは民国時代、「満洲国」時代（一九三五年～一九四五年）と新中国時代（一九四九年～二〇〇四年）であった。この長い人生の中で疑遲はまったく違う社会環境・体制を生きた。幼少と青年期のはじめはロシア文化の要素の強い哈爾濱時代（一九一三年～一九三五年）、青年期の多くを「満洲国」時代（一九三五年～一九四五年）に過ごし、中年以後に共産党政権の新中国時代（一九四五年～二〇〇四年）を迎えた。正に波乱の生涯を送ったと言えるだろう。

疑遲の文学が論じられるとき、常に当時の複雑な政治情勢に惑わされ、作者の本音はあたかも霧に包まれているかのようであった。疑遲文学に政治的な色彩を与える、あるいは政治的な評価を下すよりも、彼の文学の神髄を凝視すべきであろう。

上記の三つの時代と三つの社会は疑遲文学に複雑な様相を程したと言えよう。しかし、本論で哈爾濱時代を中心に見てきた結果から見れば、疑遲文学のもう一つ側面が見えてきたのではないだろうか。哈爾濱時代に培われたロシア文学の体験による審美眼が後年に疑遲文学の粋と言われる多くの作品の誕生に繋がったのだろう。露西亜文化の栄養素は彼の心にごく自然な形で染み込み、彼独自の文学の形成に多大な影響を与えたと言える。「満洲国」時代の自由ではない環境のなか、疑遲は作家として開花した。作品に盛り込ませたロシア情緒は、疑遲にとっては、心の拠り所であり、ロマンスでもあったと思われる。彼の評価に値する主要作品は「満洲国」時代の九年間（一九三六年～一九四四年）に集中していることから、それは証明できるだろう。彼は貴重な遺産を残してくれた。そこには「満洲国」の真実の一部や人びとの心象風景が描かれている。新中国になってから、疑遲は植民地の二等国民という境地から解放されたが、作家としては抹殺された。政治の複雑さと残酷さを改めて痛感する。

「満洲」関係の資料が大量に公開されている昨今、我々にはすべての事物と人物に対して客観的に研究する条件が提供されている。そのため、疑遲が書き残した作品からも、「満洲国」の実態を、よりの確に把握することができるようになった。疑遲の作品の大多数に下層社会の人々に寄せた限らない同情と深い理解が表現されており、それは疑遲文学の大きな柱になっている。疑遲文学の複雑さは「満洲国」の特殊性によって生み出されたものであろう。疑遲が情熱をもって書き残した数々の作品は、間違いなく、今日の東北淪陥期文学研究の貴重な文献となっている。

付記：

- 1 『同心結』は康徳十年（一九四三年）藝文書房版をテキストにした。
- 2 『雁南飛』は『明明』第一巻、第五期（一九三七年）をテキストにした。翻訳は大内隆雄『満人作家小説集第2輯 蒲公英』（三和書房、一九四〇年）を参考にした。

注

- 1) 一九三九年の秋に古丁を中心にして、藝文事務所を創設し、純文学雑誌『藝文志』を創刊した。この雑誌に所属していた同人のことを当時の文壇では「藝文志派」と呼んでいた。
- 2) 薛連拳『哈爾濱人口の変遷』（黒竜江人民出版社 一九九八年）、五十七頁。また疑遲の「『明明』を回想して」（注13）によると、当時二十万人以上の白ロシア人が哈爾濱に居住していたという。
- 3) 上官纓——一九三一年～二〇〇九年。淪陥期文学評論家、作家。筆者がインタビューし、疑遲に関するご教示を賜った。上官纓が筆者に紹介した内容は他の研究者の著書にも同じ事実が書かれている。

- 4) 翻訳した論文には「翻訳映画の芸術」(『電影藝術譯叢』中央電影局出版、一九五三年十一月十二月合訂号)がある。ソ連映画監督のB. 列高申(ロシア語不詳)が著したものであり、映画翻訳の実践、手法、技巧及び芸術について述べられている。また劉遲(疑遅)が翻訳したソ連映画のリスト、ソ連映画の台本や紹介は上海図書館で多く見つかった。ロシア語を併記したものがないので、以下に中国語の題名のみを記しておく。①『光明照耀到克奧爾地村』中央電影局東北電影製片廠 一九五三年。②『秘密使節』中央電影局 一九五一年。③『欽差大臣』中央電影局 一九五三年。④『鄉村醫生』(孟広均と共訳)出版社と出版年不詳。⑤『伊万雷帝』中央電影局東北電影製片廠 出版年不詳。⑥『政府委員』藝術出版社(北京)一九五六年。⑦『木木』(ツルゲーネフの同名短編小説を改編。長春電影製片廠訳。以上、『大衆電影』二四六期、一九六一年六月号の紹介による。
- 5) 「藝文指導要綱」は一九四一年三月二十三日「満洲国」弘報處によって公布された。政府の文藝政策が示された規定である。
- 6) 「満洲封禁思想」は康熙帝(在位一六六一年—一七七二年)から始まったと言われている。父祖の女真民族の特質と故郷である満洲の地を守るために、実施した特別政策のことを指す。漢民族の入植や土地開発は厳しく禁じられていた(小峰和夫『満洲[起源・植民・覇権]』、御茶の水書房、一九九二年、三十五頁—四十四頁)。
- 7) 坂本秀昭・伊賀上菜穂著『旧「満洲」ロシア人村の人々』(東洋書店、二〇〇七年)二十八頁。本著書に言及した塚本は塚本浩二のことであり、引用した塚本説は『満蒙紀行』(筑摩書房、一九七二年)によるものである。
- 8) 「山丁花」は『明明』の一九三七年第三期に発表した木樵たちの苦難の生活を描いた短編小説である。同五期に作家梁山丁が「郷土文藝と山丁花」という作品を発表し、「郷土文藝を代表する作品である」と高く評価した。
- 9) 『植民地年鑑④昭和一三年版』(日本図書センター、復刻版、一九九九年五月)二〇九頁。
- 10) 同9)、二一〇頁。
- 11) 糧棧というのは、農民から大豆を収集し選別、貯蔵し、それを加工業者に売り渡す商人であり、かつ高利で農民に金を貸し与える金融業者であり、多くは大地主でもあった。(小林英夫『〈満洲〉の歴史』、講談社現代新書、二〇〇八年、十六頁)。
- 12) 岡部牧夫『満洲国』(三省堂選書四八、一九七八年)一六三頁。
- 13) 『地球の一点から』七六号~七八号(西田勝・平和研究室、一九九五年三月~五月)に連載された。
- 14) 申殿和・黄万華『東北淪陥時期文学史論』(北方文芸出版社、一九九一年)一七八頁。
- 15) 逢増玉「〈鉄流〉〈壊滅〉と東北作家群創作」(『東北師大学報』一九九一年一期)。
- 16) 小松「夷馳及其作品」(陳因『満洲作家論集』実業印書館、一九四三年)三一九頁。

(大谷大学准教授)